原著論文

「アマチュア」であることの教育哲学的考察： 1964 東京オリンピックメダリスト円谷幸吉の自死を手がかりに¹

高 田 春 奈（東京大学大学院）²

Abstract

This paper examines the consideration of “amateurism” in philosophy of education, referring to the death of Kokichi Tsuburaya, a long-distance runner who had won the bronze medal at the 1964 Tokyo Olympics. He committed suicide in 1967 just before the selection of the Mexico Olympics.

Although the Olympic at that time was nominally regarded as an amateur festival, many of athletes in those days actually worked and attended the Games professionally. Tsuburaya belonged to Japan Self-Defense Forces Physical Training School, a national training institution for athletes, and many people believe that he chose to die due to the pressure of the organization.

However, this paper tried to provide the new perspective for the affair and to gain an educational philosophical awareness, not only by considering the social significance of his death, but also what kind of changes occurred in his mind as a human being.

First, the paper examined his and other athletes' life and mind at that time. And then it reconsidered the definition of “amateurism” using the theories of Higuchi, Imamura, and Hannah Arendt. The conclusion of this paper is that he chose to die himself because he could not withdraw into the “private territory” as a human being where his family and lovers are, neither he could not appear to the “public territory” as an individual who escaped from the evaluation by others. In other words, he was not an “amateur” and a “hero”, in Arendt's words, who lived his own story and who created unexpected things in “the space of appearance”.

This is possibly one of the significant modern educational issues, not only in sports. This viewpoint would propose another possibility of public education that every person can be accepted “just being that person in the world”, not only “coming to be able to something”.

Keywords: amateurism, Hanna Arendt, sports and labor, the space of appearance, hero

キーワード：アマチュアリズム, ハンナ・アレント, スポーツと労働, 現われの空間, 英雄

¹ Significance of “being Amateur” in philosophy of education: With special reference to the death of Kokichi Tsuburaya, a Japanese medalist at Tokyo Olympic 1964

² Haruna TAKATA, The University of Tokyo, Graduate School of Education, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033, Japan

1. はじめに：本論文の目的と先行研究

本論文は、1964年の東京オリンピックで銅メダルを獲得しながら、その3年後、メキシコオリンピックの選考を前に自ら命を絶った長距離ランナー円谷幸吉の死を手がかりに、「アマチュアリズム」の教育哲学的考察を試みるものである。オリンピックメダリストの自死という衝撃的な出来事は、週刊誌やノンフィクションなど様々な形で語られ、描かれてきた。地元福島県須賀川市は家族の意志を受け継ぎ、メモリアルホールを開設、そこには当時の資料や記念品などが展示されている。また円谷は家族や恩師、友人などに膨大な手紙を送っており、それらも当時の円谷当人の気持ちを推し量る重大なヒントになっている。2019年にはスポーツライター松下茂典が新たな調査を行い、円谷が死の直前に関わった新たな女性についても聞き取りを行い、さらにその人生の回顧に厚みを加えている¹⁾。円谷の死の原因についても当時から今に至るまで、記者、作家、研究者など様々な角度で考察され、その論議はある程度収斂されたものとなっているようにも見える。

「教育」という観点での先行研究としては、岡部・友添・吉永・稲葉による論²⁾があげられるが、そこでは円谷の死がスポーツ競技者にもたらす意味を、2つにまとめている。一つは「競技者が背負う『重圧』を鮮明化する契機」である。円谷は周囲からの過度な期待や社会的重圧によって死を選んだ。その競技者が感じる重圧の意味を人々が考えるきっかけになったと捉えている。そしてもう一つには「競技者のスポーツ観の転機を促す『カウンターパート』」としての意味である。円谷が感じた重圧がもたらす問題が浮き彫りになることによって、現代の競技者に「自分のために」頑張ることを正当化することを可能にし、現代の競技者にとって「円谷の世代の支配的なスポーツ観」を相対化することができるようになったという。確かにこれ

らの考察は現代の競技者、特にスポーツに励む子どもたちへの教育的観点でも有益なものだといえるだろう。部活動をはじめとするスポーツの世界における組織的抑圧やパワーハラスメントの問題は、結果を出すためならば仕方ないと捉えられがちだったこれまでの風潮を露呈した。円谷と同じような悲劇を繰り返さぬため、スポーツや教育の現場では、根性論に陥りがちな厳しい指導のあり方を再考する機会が増えている。

しかし本稿ではそこからより円谷個人に寄り添った視点で考察を加えたい。すなわち、当時の社会的な状況や風潮を教育社会学的に考察することによってその死に意義を見出そうとするだけでなく、一人の人間としての円谷幸吉の存在や心にどのような変化があったのかを考察することによって、教育哲学的な視点でその人の存在や心と対峙することの重要性を理解しようというものである。

ここでキーワードとして取り上げるのが「アマチュアリズム」である。「アマチュアリズム」は「プロフェッショナリズム」の対義語であり、いずれも職業やスポーツにおいて用いられる用語である。オリンピックとしての円谷は、世界の頂点を目指すプロのアスリートでもあったが、オリンピックは当時、アマチュアスポーツの頂点でもあった³⁾。自衛隊員でもあった円谷のアスリート人生は、プロとしてのものであったのか、アマチュアとしてのものであったのか。そしてそれがいかに自死という結末と結び付くのか。この論文では、樋口聡、今村仁司、ハンナ・アレントといった思想家の「アマチュアリズム」や「労働」に関する議論を参照し、何者(what)としてのオリンピックメダリストではなく、誰(who)としての円谷幸吉個人の姿を見つめ、今日の教育、特に広い意味での市民性教育における「その人であることを受け入れる」重要性を理解することを試みる⁴⁾。

2. 円谷幸吉の死

2.1 円谷幸吉の生涯⁵⁾

円谷幸吉は1940年5月、円谷幸七、ミツの7番目の子どもとして福島県須賀川市に生まれた。父の幸七は近所でも厳しいと評判で、円谷家には躰の四か条（①自分のことは自分で、②履物、衣服は揃えて、③呼ばれたら返事を、④人には挨拶を）があったという⁶⁾。幸吉は8歳上の三男喜久造が走っている様子を見て自らの意志で長距離走を始め、高校二年生から在学していた福島県立須賀川高等学校の陸上部に入り、競技として走り始める。高校を卒業した1958年に自衛隊に入隊、そこでも半ば趣味のように走り続け、その才能を見出されて、1961年設立したばかりの自衛隊体育学校に特別体育課程の一人として入校し、恩師島野洋夫のもと記録を伸ばしていった。1963年には自衛隊体育学校のすぐそばにあった中央大学の夜間部に入学。その理由は当時箱根駅伝6連覇をしていた陸上部で練習ができる環境を求めたことに加え、将来自衛隊幹部になるにあたって必要な大卒の資格を得るためでもあった。そこでは競技人生を応援してくれる大切な友人たちにも出会うことができた。1964年、マラソン2回目にして東京オリンピックの半年前に行われた毎日マラソンで2位となり、オリンピック代表に選ばれた。そして出場したオリンピック本番は日本人として最高位の銅メダルを獲得し、日本中から知られる存在となる。メダルを獲得したとき、円谷は記者会見で「マラソンを始めて日が浅いの、よくここまで走れたと思います。この銅メダルは私自身がいただきます。しかしポールに上がった日の丸は国民の皆さんの声援のおかげです。あと四年間、きっちり練習すれば、メキシコではもっといい成績を残せると思います」と述べた⁷⁾。この言葉はそれまでの円谷とその後の円谷の変化を探るうえで、大きな転換点を示すものとして、重要な意味を持って

いる。

そこから4年後のメキシコオリンピックを目指して新たなスタートを切るも、自衛隊として実業団登録していながら、在籍していた中央大学で日本学生陸上競技連合にも登録していたという二重登録が社会問題となり、大会不出場に陥った。その後出場した大会の成績も、後輩たちの躍進や練習不足で振るわなかった。1966年には、久留米の陸上自衛隊幹部候補生学校に入校することが決まり、卒業後の将来は約束されたが、授業や課外演習も忙しく、練習もままならなかった。私生活ではよしこという婚約者がいたが、幹部候補生として忙しい最中、恩師島野の後押しもむなしく、当時の自衛隊体育学校長の吉池の反対もあり、破談となってしまう。そして同時期に、それまで公私ともにサポートした島野が北海道へ転勤となり、更に心の支えを失ってしまう。幹部学校を卒業後、いくつかの大会に出るも成績は振るわず、自ら立てた無茶なスケジュールも祟り、両足のアキレス腱断裂と椎間板ヘルニアを患う。1967年夏から秋にかけて3か月間の入院生活を送り、11月に退院してから翌年のメキシコオリンピックを目指して合宿に参加はしたものの、ライバルたちの記録だけが伸びていき、代表入りは絶望的だった。

同年12月30日、一つ上の兄幸造と実家の須賀川へ戻り、両親、兄弟夫婦、甥や姪たちと正月を過ごした後、年が明けて1月5日、体育学校に戻る。その4日後、幹部宿舎の自室で普段使っていた両刃の剃刀で右頸動脈を切って亡くなっているのが発見された。1月13日、陸上自衛隊の大講堂で自衛隊葬が執り行われ、翌日故郷に遺骨は戻った。須賀川駅前には市民5000人が出迎え、陸上自衛隊郡山音楽隊が葬送曲を奏でたという。

2.2 遺書と死への考察

円谷は2通の遺書を残していた⁸⁾。一つは家

族、親族に宛てたもの、もう一つは仕事でお世話になった自衛隊体育学校の幹部に宛てたものである。家族に対しては死の直前の正月の帰省を振り返るところから始まり、その文章は世紀の遺書として語られる⁹⁾。

父上様 母上様 三日とろゝ、美味しうございました。干し柿、もちも美味しうございました。敏夫兄、姉上様、おすし美味しうございました。
(中略)¹⁰⁾
幸雄君、…(中略)¹¹⁾…立派な人になって下さい。

父上様 母上様 幸吉は、もうすっかり疲れ切ってしまって走れません。
何卒 お許し下さい。
気が休まる事なく、御苦労、御心配をお掛け致し申し訳ありません。
幸吉は父母上様の側で暮しとうございました。

そして他方、自衛隊の幹部に対しては以下のような文面を残した。

校長先生済みません。
高長課長、何もし得ませんでした。
宮下教官、御厄介お掛け通しで済みません。

企画室長、お約束守れず相済みません。

メキシコオリンピックの御成功を祈り上げます。

一九六八・一

作家の川端康成は、同年3月発行の雑誌のエッセイで、円谷の遺書を「ひとへに素直で清らかである。」と賞し、同じく作家の三島由紀夫は、円谷の遺体発見の4日後の新聞に『円谷二尉の自刃一孤高にして雄々しい自尊心』というタイトルでその死の崇高さについて熱く語っ

た。しかしその死を語る多くの論者は、一度メダルを取ったアスリートが受けた重圧を、死を選んだ理由の第一に挙げ、悲劇として捉えている。「故障の回復が思わしくなく、オリンピック・イヤーを迎えて、自衛隊をはじめとする大きな期待が、精神的負担となり、挫折感が動機となったのかもしれない」(東京オリンピック日本選手団長で自らもメダリストの大島謙吉)。「死の報を聞いた時、直観として頭に浮かんだのは、入院中、円谷君が異常なまでに、メキシコを意識していたことだ」(幸吉が入院した第三品川病院の院長、河野稔)。「几帳面、まじめ、礼儀正しさなどに集約される、円谷選手の性格が、外からの期待、圧力といったものをどう受け止めていたか。その受け止め方が、彼をここまで追い込んでしまったのではないか」(体育心理学者で東京オリンピック陸上競技のスターターを務めた松田岩男)。円谷の死は、美しく語られがちなオリンピックの負の側面を浮き彫りにした出来事として捉えられたと言えよう¹²⁾。

しかしここで注目したいのは、円谷がいくら「重圧」に押しつぶされて死を選んだとはいえ、どこにも出口を見出せないほどに不幸な境遇にあったわけではなかったという点である。例えば大好きで始めた「走る」ということに対して最後まで強制されている感覚はなかったし、人間関係においても、結婚の破談や恩師との別れなど苦しい出来事はあれど、家族の絆は深く、友人やお世話になった人たちとのコミュニケーションも頻繁に行われていた様子もあった。大好きな仕事、大好きな人たちの愛にも恵まれた中で、なぜ死を選ばざるを得なかったのか。それを検討するため、次章では彼が生きた時代背景をより掘り下げ、ただ走ることが好きだった子どもの「アマチュア」時代と、「メダリスト」として結果を出さねばならなくなった「プロ」として生きた時代の変化に着目する。

3. 円谷幸吉の生きた時代と「アマチュアリズム」

3.1 オリンピックと「アマチュアリズム」

オリンピックという多くのスポーツにとって世界最高峰の舞台ではあるが、少し前までは「アマチュアスポーツの祭典」のイメージも同時に持ち合わせていた。内海はアマチュアリズムの変遷を3つの時代に分けて考察している¹³⁾。

まず第1期の1860年から1890年頃はアマチュアリズムが成立、普及したとされる。元々スポーツは封建貴族の楽しみとして捉えられていたが、そのような露骨な階級的規定を取り除いたとしても、経済的規定を設けることにより、資本家階級による独占が可能であった時代である。それは「アマチュアリズム」を「自分の金を使い、誰からも援助を受けずに、自分の為にスポーツを行う」¹⁴⁾ ことと規定することで成立できた。第2期(1890年代～1950年代)は、そのような経済的規定の矛盾が拡大し、倫理的規定が必要となった時代である。1894年、P・クーベルタンは近代オリンピック復興のために、世界各国のスポーツ関係者、教育者、政治家などを集め、第1回オリンピック・コングレスを開催。そして2年後の1896年にギリシャのアテネで第1回の近代オリンピックが開催された。オリンピックを復興するうえで、アマチュアリズムの問題は当初から大きな比重を占めていた。1901年の第4回IOC総会で正式に定められた「金のために競技をするもの」はアマチュアではないという経済的規定は徐々にそのあり方が後退し、スポーツをするのは「紳士あるいはその品位あるもの」に限るとか、「スポーツそれ自体を享受するもの」といった倫理的規定が生まれていったのだという¹⁵⁾。そのような変遷を経て、円谷が銅メダルを獲得した1964年の東京オリンピックも含む1950年代から1980年代の第3期はアマチュアリズム崩壊期として、アマチュア規定が全廃され、オープン化し

ていくようになった。少し詳しく確認しよう。

ソ連が初めてオリンピックに参加した1952年のヘルシンキオリンピック以降、社会主義国はスポーツの公共化、すなわち労働者階級の選手を国家として強化していくことにより、米ソ冷戦体制の中でその位置づけを高めていく国策をとっていた¹⁶⁾。そのような社会主義国で国家が養成する競技者は「ステート・アマ(チュア)」と呼ばれ、英米はそれを隠れたプロだと非難した。しかしソ連は「社会主義国には、資本主義国にいるようなプロはいない。すべてのスポーツマンは、アマチュアだ」と反論する¹⁷⁾。当時IOCの定めたアマチュア規則(オリンピック参加資格規定)には、「競技会に参加するために失った給料の補償は許されない」という記述があったが、これに照らし合わせるとソ連などの社会主義国がそれを破っているということとはできない。一方資本主義国は競技面で対抗するために、これまで排除してきた労働者階級を取り込んで、スポーツを高度化していく必要が出てきたが、そこで資本、企業という私的機関に依存することはアマチュア規定に触れてしまうという自己矛盾をはらんでしまっていた¹⁸⁾。同時にIOCにとってもオリンピックが「世界最高の競技大会」として人々の関心を失わせないためには、既定の柔軟化に妥協せざるを得なかった。そうして1974年、オリンピック憲章から「アマチュア」という表現は消え、1981年にはIOCでの参加資格規定さえもすべて各国国際競技連盟に委ねることになったのである¹⁹⁾。

日本に目を向けてみると、1912年ストックホルムオリンピックへの参加母体として、大日本体育協会が誕生した。その年のオリンピック派遣選手予選会の参加規程には「経費自弁とすること」と合わせて、「品行方正であること」や「市町村の推薦を有すること」などが掲げられており、当初から倫理的規定が強かったのが特徴的である²⁰⁾。1956年日本体育協会が出した「スポーツ憲章中間報告」では、社会主義国

の「ステート・アマ」への露骨な敵意を示していたというのが、1960年には東京オリンピックに向けて、「ステート・アマ」とも「ミリタリー・アマ」とも言われる「自衛隊体育学校」が発足した²¹⁾。日本で「アマチュア」の表現が消えたのは1985年の「アマチュア規定検討委員会」の検討過程であり、1986年「スポーツ憲章」を採択後、アマのプロ化は各競技団体に委ねられ、事実上のオープン化となった。日本ではもともと、企業選手、すなわち企業に属し、普段のトレーニングや試合でいい成績をあげることが仕事として認められ給与が支払われた競技者が「ノンプロ」として活躍していた曖昧な制度が台頭していたこともあり、欧米に対してオープン化が遅れたと言われている。

すなわち円谷がメダルを獲得した東京オリンピックは、アマチュアの祭典としての側面を強く持ち合わせていながら、同時にメダリストが英雄として称賛され、その輩出に各国が力を注いでいた真っ只中の時代だったと言える。そのような中、アスリートたちはどのような想いでそれに臨んでいたのか。次節以降、詳しく当時活躍したアスリートと円谷幸吉を比較しながら、掘り下げて検討する。

3.2 「教育」の場としての自衛隊体育学校（三宅義信との比較）

渡邊²²⁾によると、近代オリンピック大会は1896年に第1回が開催されて以来、開催国の軍隊の協力によって運営された面が少ない。日本でも東京で1964年にオリンピックが開催されることが決まって以降、1961年スポーツ振興法などが制定された国会で自衛隊法も改正され、自衛隊が業務としてオリンピックの運営に関わることが正式に可能になった。同年8月には、陸海空自衛隊の共同機関として陸上自衛隊朝霞駐屯地に自衛隊体育学校が創設される。設立の目的として「部隊等における体育指導者の育成」、「オリンピック等国際級選手の育

成」、「体育に関する調査研究」が挙げられているが、実際には1964年の東京オリンピックで「開催国として恥ずかしくない成績を上げるための手段として設立された」と言えるだろう²³⁾。そこで実際に自衛隊体育学校からメダルを獲得したのが、ウエイトリフティングの三宅義信とマラソンの円谷幸吉であった。

三宅は法政大学在学中だった1960年のローマオリンピックでも銀メダルを獲得したトップアスリートで、1962年に大学を卒業後、自衛隊体育学校の1期生として入学。1964年の東京オリンピック、1968年のメキシコオリンピックで、続けて金メダルを獲得した。現役引退後も自衛官として勤務を続け、1997年自衛隊体育学校の校長の職を最後に退官している。当初からエリートとして期待され活躍し続けた三宅との比較は、当時の自衛隊のあり方や円谷の心情を検討するのに有益である。

円谷の縁談を壊し、競技へのプレッシャーをかけ、彼を死に追い込んだ理由として挙げられることの多い第三代自衛隊体育学校長の吉池重朝は、東京オリンピックで三宅が金メダルを獲得した翌日、総務部長として以下のようなコメントをスポーツ紙に残している。「三宅はゆくゆくは教官となって隊内の若い者を育ててもらうために入れたのだが、円谷は十八の時から生粋の自衛隊っ子。秋田の国体で決勝に残り、脚光を浴びた直後、他へ就職したいといってきた。隊内の模範生でもあっただけに、どうしても出て行かれては困ると円谷を説得したものだ。…（中略）…陸連の役員によくいってるんだ。高校のA級選手はみんな大学へいってしまうだろうが、自衛隊にはB級の選手をまわしてくれるように努力してほしい。自衛隊はそれらの選手を独自の方法で国際級に育てていくとね」²⁴⁾。それは今の自衛隊体育学校の姿勢と変わらない。渡邊のいうように「超一流のホープは企業にとられても、体育学校はこれから期待できる選手を採用して伸ばすことができる。

あるいは、一度故障したり挫折したりした選手を再生させるのも得意分野である。」「育てる、教育するというのは自衛隊の文化」²⁵⁾なのである。

エリートではなく、次点の選手に着目し、「教育」によって一流にする。自衛隊体育学校は「アマチュア」から「プロ」に変化させる機関であり、円谷はその1期生とも言える。スポーツ評論家の川本信正が「日本のスポーツ界は、行き過ぎた勝利第一主義に毒されてしまった。また、自衛隊体育学校は、金メダル至上主義で、選手養成機関と化し、校内には“メキシコ・オリンピックまで、あと〇日”という掲示までして、特訓を重ねている。円谷君は優しい性格の男で、日本のスポーツ界と、自衛隊の二重の“十字架”の重さに耐えられなくなったのだろう」²⁶⁾と言うように、自衛隊体育学校の体制や体質を円谷の死と直結させる論は尽きない。しかし単純に「強制」や「抑圧」という言葉では済まされない難しさが2つある。一つは教育につきものの指導者の愛が実際には存在すること。もう一つには競技者自身に競技への強い思いが存在することである。

松下は、三宅をはじめ自衛隊に近い人ほど学校長の吉池を擁護し、遠い人ほど彼を批判する傾向があるという²⁷⁾。三宅は吉池のことを、気に食わないことがあるとすぐに怒り、主義主張を曲げない人だと言いつつも、自身も自衛隊体育学校の校長を務めた経験から吉池の気持ちにも理解を示す。自衛隊はメダルを目指さなくてはならない立場にあり、実は吉池は円谷にも特別目をかけていた。だからこそ、メキシコオリンピックが終わるまで結婚なんてことは許せなかったのである²⁸⁾。さらに三宅は円谷の死後半世紀を経てこう語っている。「彼には何度も言ったんだ。おまえは、コーチ、監督になって人を育てろとね。だけど、指導者にはならなかった。あいつは何よりも走るのが好きだから、やっぱり走りたかったんだろなあ…」²⁹⁾。

自衛隊体育学校は、円谷を日本代表として再度オリンピックでメダルを取らせるために重圧をかけ、再生させようとした。それは一見、よくある抑圧の形に見えるかもしれない。しかし結果的に円谷は走り続けることを自分で選んだ。それは学校長や国民からの期待に応えなかった思いと、ただ走ることが好きだという気持ち根底にあったからに他ならない。

3.3 「セミプロ」としての企業スポーツ（君原健二との比較）

また三宅ともう一人、当時活躍したアスリートとして注目したいのが君原健二である。君原は「実業団の百花繚乱」当時、八幡製鉄所の一員として選手生活を送っている³⁰⁾。君原は入社こそ卒業直前の滑り込みで必ずしも期待されていたとは言えない選手だったが、その後頭角を現し、円谷と同じく東京オリンピックを目指す代表のニュージーランド合宿にも参加、直前の選考レースとなった毎日マラソンで優勝して、一番手として代表に選ばれている。しかしそんな君原は当時を振り返り、職場の人たちが仕事をして、その後に練習をしているにもかかわらず、1週間から10日の合宿をしていた自分を「セミプロ」のように感じ、勝利の価値さへ疑ったという³¹⁾。東京オリンピックにおいても「国を挙げての英雄扱い、大きな期待があまりにも自分の真実の姿からかけ離れているように感じられた」³²⁾。そして結果は8位に終わり、他方あまり注目されていなかった円谷が銅メダルを獲得し、一躍スターに踊りでた。

君原は東京オリンピック閉幕後、八幡製鉄所の陸上部を退部した。東京オリンピックで仕事を終えたと判断し、多くの人に注目されることなく、自分だけの生活を取り戻したいと考えたのだ³³⁾。先に見たように、この頃の日本のアマチュア規定は非常に曖昧なものであった。君原はそこに「アマチュア競技の純真性」を疑い³⁴⁾、「平等性」を感じなかった³⁵⁾。会社からの

特別待遇を断り、定時まで仕事をして帰宅する。文通をしていた相手と会うようになり、2年後には結婚もした。結婚相手とは「民主主義を家庭の内外でも守ろう」と誓いを立てた³⁶⁾。

それでもコーチの高橋は君原にメキシコオリンピックを共に目指そうと呼びかけ続け、君原の結婚の仲人にもなり「余暇で走るのがアマチュアスポーツ」とまで言って背中を押した³⁷⁾。そして信頼するコーチと自分らしく競技を続けた君原は、結婚直後のボストンマラソンにて好記録で入賞。それはちょうど円谷の婚約が破談になった年である。そして君原はメキシコオリンピックで東京オリンピックの円谷を超える銀メダルを獲得した。

「自分らしさ」を貫いた君原と、「周囲への期待」に応えようとした円谷は対照的である。円谷は幼い頃から父親の教えを真摯に守る子どもで、オリンピックでも「後ろを振り向くな」という父の教えを守り、背後に迫る3位の選手を振り向くことなくそのまま抜かれて、銅メダルになったという逸話も有名なほどだ³⁸⁾。家族や友人、恩師に支えられオリンピックメダリストにまでなることができたが、その後、競技に集中すべきという理由で自分の愛する人との結婚を許されず、恩師とも引き裂かれた。メダリストとして周囲からの期待に応えたい思いを抱きながらも、怪我も含めた不調に悩まされた。その間、円谷は長兄敏雄に宛てた手紙の中で、なぜ単なる一自衛官にすぎない自分の結婚を、新聞等を通じて発表しなければならないのか、と吐露した³⁹⁾。さらには周囲から英雄視される中で、「いつも二つのものが対立し、お前は何をすればよいのか、これで良いのか、いやこれではお前が駄目になるぞと、その様な複雑な気持」が生まれる苦しさから、「出来うれば一般部隊へ行つてのんびりした気持で若者達と純粋な気持でやりたい」とも語った⁴⁰⁾。しかし最終的には学校長に半ば説得される形で「折角築いた礎をここでゼロに戻しては、人間（円谷）も

失格になりますから…。」と腹をくくった⁴¹⁾。

企業スポーツの中で自分の存在を見つめ直した結果、君原は一度周囲からの期待と距離を置き一人の人間になる選択をした。同じように円谷も自分が英雄扱いされることに悩み苦しんだが、そこから抜け出すことができなかった。「アマチュア」であり続けようと一個人としての生き方を確立し、再度好きなマラソンに肩の力を抜いて臨んだ君原の姿と照らし合わせると、それができなかった円谷の不器用さがより際立ってくる。次章からはその円谷の葛藤について、思想家達の議論を参照、整理しながら、哲学的に考察する。

4. 「アマチュアリズム」の哲学的考察

4.1 競技への関わり方としての「アマチュアリズム」

ここまで円谷幸吉の生涯と時代背景を振り返り、オリンピックの英雄として生きることの苦悩を見てきた。その苦悩は「プロ」として周囲からの期待に応える重責とも置き換えることができよう。本章ではその苦しみからの解放を考える鍵として「プロ」の対義語である「アマチュア」であることに着目し、本論文の結論を導き出すことを試みる。まず本節では樋口聡のスポーツと労働をめぐる遊戯的考察を参考に、問題の所在を検討する⁴²⁾。

スポーツにおけるプロとアマチュアを区分する際、基準として用いられやすいのは、一つに金銭的報酬の有無、もう一つにプレーヤーの技能のレベルである⁴³⁾。樋口によると、オリンピックにおけるアマチュアリズムの思想は、スポーツの職業化（金銭的報酬を得るようになること）を拒んできたが、サマランチ時代⁴⁴⁾に一挙に崩されたという⁴⁵⁾。さらには「金銭的報酬という経済的な価値は、もっぱら技能水準によって決められるほど単純ではなく、他の才能を持ち込めば、たとえ技能水準のレベルが低く

とも、多大な金銭的收入をあげられることが可能な世の中」にさえなってしまった⁴⁶⁾。それではそのような現状に至るまで、歴史的にスポーツと労働の関係性はいかに考察されてきたのか。

樋口はまずそれ自体に目的を持つ自己目的的活動としてのスポーツと、生命や生計保持のための活動としての労働との違いを指摘する考え方の枠組みを、考えるきっかけとして提示する。スポーツがそれそのものを目的とするのに対し、労働はその先にある社会的利益を得る手段として存在する。ゆえにスポーツは報酬を得ない「アマチュア」でなければならないという論である⁴⁷⁾。このような考え方は、50年以上前から存在していたというが、現在においてもスポーツの純粋性を語るのになお残る一つの見方とも言えるであろう。これに対しペロ・リガウアが『スポーツと労働 (1969)』で指摘した「スポーツは初期の資本主義のブルジョア社会に起源を持つ多くの社会的象徴と並行関係にある」、言い換えれば「規律・訓練、権威、競争、達成、目標を目指す合理性、組織化と官僚主義化などの基本的特徴は、現代の産業社会の生産的労働と同様にスポーツにも観察される」という議論が存在する⁴⁸⁾。このことは円谷が身を置いた自衛隊体育学校のあり方を想像すれば理解しやすい。メダルを獲得するために「目標」を掲げ、組織の「規律」の中で、メダリストを「育成」「生産」する様子に、スポーツと労働を重ねても違和感はない。そこにスポーツの自己目的性を見出すことはできない。それに対し、本書を英訳したグートマンは、その指摘に一定の理解を示しつつ「スポーツは遊戯の世界の一形態とみることができるし、自己実現の体験とも言えるのだ」と反論する⁴⁹⁾。「スポーツが本当に抑圧の装置であるとするならば、社会的に恵まれた人々が好んでそれに参加するようなことがうまく説明できない。(中略)スポーツには熱狂、喜び、自己実現が確かにあり、それは〈誤った意識〉として片付けられない」からである⁵⁰⁾。

上記の議論をもとに、樋口が着目したのは「カテゴリーの誤謬」だ。すなわち「スポーツ」と「遊戯」その対立概念としての「労働」はカテゴリー的に切り離して考えねばならないという指摘である。スポーツは「遊戯」であり「労働」でもある。その違いは、「一定の客観的な構造を持ったスポーツへの『人々の関わり方』」にあるのではないか⁵¹⁾。アマチュアの野球もプロ野球も、野球に対する個人の「関わり方」によって、「遊戯」にも「労働」にもなりうる。ここで重要なのは、「スポーツ」が何であるかではなく、スポーツにどう関わるか、「遊戯」としてなのか「労働」としてなのか、なのである。

そこで樋口が着目するのが、未開社会から近代にかけての労働観について考察した今村仁司の「労働 (labor)」「仕事 (work)」「行為 (action)」の区別である⁵²⁾。それによると、「労働」は「人間が自然的＝生物的存在であるがゆえに、必ずおこなわなければならない生命活動」である。「仕事」は「古代ではテクネーないしポイエーシスとよばれ、道具的政策的活動であり、道具を利用して、消費財と異なる耐久的事物をつくる」ことである。そして「行為」は「仕事」が用意した共通のものを土台として、「人と人との公共的関係を運営する活動」ならびにプラクシスである⁵³⁾。今村はこの区分をもとに、ただ働くことそのものを否定するのではなく、生命維持のために余儀なく行わなければならない「奴隷的労働」からの解放を主張する。そして「労働」の性質を転換するための蝶番として「遊戯性」を持ち出すのである。「人間的な諸活動が奴隷的性格を離脱し、遊戯性をエーテルとした自由な活動（古代のプラクシス）へと転換させることこそ、たとえ現在ではユートピアであっても、手放すことのできない理念たりうる。」⁵⁴⁾

さらに樋口は「スポーツという事象が遊戯性を内在させていることこそが重要」なのであり、「労働から解放されて遊戯性と結合した『仕

事』へ向かうために、スポーツは一つの可能性を持っていると言えるのではないかと述べる。スポーツがその人の生計を立てる「職業」であろうとも、それそのものに内在する「遊戯性」は確かに存在する。その姿に、人が奴隷的労働から解放される契機を見出すことができるかもしれないというのだ。⁵⁵⁾

それを円谷に置き換えれば、ただ好きで走っていただけの高校時代も、自衛隊に入りオリンピックアンとしてマラソンランナーになった「プロ」としての時代も、走ることが好きで走っていた姿には「遊戯性」が感じられる。その意味において円谷は、果たして「奴隷的労働」として、言い換えればお金のためにマラソンを「やらされていたか」というと、実際にはそうではない。それでは何が問題だったのか。もう少し踏み込んで考察したい。

4.2 「表象の空間」と「現われの空間」

今村が参照した古代の労働の3つの区分を用いた思想家が、ユダヤ系ドイツ人の思想家ハンナ・アレント (1906-1975) である。アレントは『人間の条件』(1958)⁵⁶⁾ およびそれを母国語であるドイツ語で書き直した『活動的生』(1960)⁵⁷⁾ において、今村同様、古代ギリシャの思想的背景をもとに、近代における働くことや公共空間における振る舞いの問題を指摘した。特にその中で注目したいのが「社会的なるもの (das Gesellschaftliche) の勃興」である⁵⁸⁾。

今村が指摘したように、アレントは「労働 (Arbeit/labor)」の奴隷的特性を批判した。食べることで生きることを目的に行う労働は、ただ人に必要に迫られたものだけをなさせるという点において奴隷的である。真の人間的な生き方とは、そのような必要性から逃れ、この世界とともに生きる異質な他者と公共空間において関係しあう「行為 (Handeln/action)」にこそある。しかし労働が賛美されるようになった近代においては、お金や生活のために働き、その働いた

ものを元手にさらに生産を繰り返すという「目的—手段の連関」が発生した。そこでは自分や家族が生きるための労働を行う「私的領域」と、他者とともに生きる活動がなされるべき「公的領域」とが混在してしまった。それが「社会的なるもの」の誕生だという指摘である。それではなぜそのことが問題なのか。

「私的領域」と「公的領域」が混在するということは、それぞれの空間が奪われるということの意味する。まずアレントは人間として何よりも「公的領域」において、言葉呼びかけ、それに応答する、という「言論 (Sprechen/speech)」と「行為 (Handeln/action)」の重要性を説いている⁵⁹⁾。「行為とは、新しい始まりとして誰かの誕生に応答するものであり、各個人において、生まれたという事実を現実化する。」「言論とは、あらかじめこの誕生のうちに与えられていた絶対的な相違に、応答するものであり、人間ならではの複数性を現実化する。」「この複数性の本質は、唯一無比の相対性を持った存在者が、誕生という始まりから死という終わりまで、つねに同等の者たちに囲まれて存在しているということ、その点に存する。」⁶⁰⁾。複数性が前提としてあるこの世界において、一人ひとは「唯一無比」に存在し、他者から「見られ、聞かれる」ことで「人間存在それ自体があらわ」になる、すなわち「現われること」ができるのである⁶¹⁾。そのためには、生きることを第一とする「私的領域」から距離を置かねばならない。しかし「私的領域」が必要でないかというところではない。生きるための「労働」や、命をつないでいく「出産」も人の生命活動が行われる場所としての「私的領域」に含まれる。それは確かに生きることに活動を制約されるという点で奴隷的とも言えるが、一方で「公的領域」のまばゆい光から庇護された「秘濁されたものの暗闇 (Verborgenheit)」と捉えることができる⁶²⁾。眠ること、食えること、自分を最良してくれる家族とともにあることは、自分の身

体を守り、力を与え、「公的領域」に現われるための助走ともなる。自分（と家族）だけで閉じこもり他者の存在しない「私的領域」だけで人間らしく生きることはできないが、「私的領域」がなければ「公的領域」に現われることもできないからである。

それらが混在した「社会」の問題はその「協約可能性」にある。協約可能であるということは、数で測ったり、優劣をつけたり、何かと交換したりすることが可能であることを示す。例えば本来図り得ない人の尊厳を比較し、優劣をつけることができるようにする。また誰とも代わりの利かない個人を、その役割をラベリングすることによって、他者と交換可能にする。そのような空間を「表象の空間 (the space of representation)」と呼ぶ⁶³⁾。表象の空間において、人は「何者」(Was / what) と捉えられる。例えば男性、老人、会社員などの特性であり、円谷幸吉であればオリンピックのメダリストや自衛隊員である。一方、公的領域は「現われの空間 (the space of appearance)」と呼ばれ、その空間においては、人は他者とは異なる唯一の存在としての「誰」(Wer / who) として見られる。すなわち100万人の人がいれば、100万の形で「現われる」ことができるのである⁶⁴⁾。

円谷や君原の生きた世界に当てはめてみれば、同じメダルを目指すランナー二人は、代替不可能な異なる魅力を持つ人間であった。そこにあるのは単なる優劣ではなく、その人らしさの先にある個々のマラソンの形に他ならない。しかし周囲からの期待や視線は、一人の固有の人間を「日本人メダリストという英雄」に変えてしまおうとする力を持つ。協約可能な社会においては、本来異なる固有の人間に、「メダリスト」として国民の期待に応えることの抑圧を与えてしまった。君原は苦しみながらもそこから逃れたが、円谷は「私的領域」に隠れることも、「公的領域」に現われることもできずに、自分が何者なのかを模索し、自ら命を絶ってし

まう不幸にたどり着いてしまったのではないか。

4.3 「アマチュアリズム」と「英雄(ヒーロー)」であること

このように考えると、「英雄(ヒーロー)」である人生は、とても苦しいことのように思われる。円谷も君原もただのマラソンランナーである自分の個人的なこと(結婚など)になぜここまで注意を払われるのか、その苦悩を語っている。しかしアレントの「ヒーロー」の定義はやや異なる。アレントは「ヒーロー」を「物語の主題」だという⁶⁵⁾。そしてその「物語」に予め「物」を作るような作者はおらず、一人ひとり固有な人間の「誕生から死までの人間の一生」としての「物語」は、「行為の結果」でしかない⁶⁶⁾。誰かに作られた物語を生きているのがヒーローなのではなく、自分固有の人生を生きた結果こそが、ヒーローの物語だというのである。そのヒーローが「現われる」空間こそが、先にみた「現われの空間」だと言える。その空間における「行為」は「あらかじめ立てられた目標や目的の実現で」ではなく、「もともとまったく志向されていなかった物語」である⁶⁷⁾。

齋藤は『「現われの空間」』は、『誰』へのアテンションが、『何』についての表象によって完全には廃棄されていないという条件のもとで生じる」と言い、その理由を個々のパフォーマンス(言葉や行為)における他者の現われに注目を寄せる「観客たち」(spectators)が居合わせ、「予期せぬことへの期待が存在する」からだという⁶⁸⁾。つまりただ一人で走るのではなく、他者の期待に応えるのでもなく、驚きを与えるような予期せぬ視線の中で、人は英雄になる。

はじめからその結果を想定されていたわけではなかった東京オリンピックでは、意外な結果をもたらした円谷に観客たちは驚き、円谷幸吉は確かに「現われ」ていた。しかしメダルを獲得したことにより、人々に次の「物語」を意志で生み出す約束をすることになってしまっ

た。死に至る前年、円谷は怪我による不調に悩まされ、焦りからやみくもに大会に出場し、更に悪化させるという悪循環に陥った。5月に出場した広島での全日本実業団対抗陸上競技選手権大会の控室で君原と円谷二人きりになった際、円谷は「メキシコオリンピックで日の丸を掲げるのは国民との約束なんだ」と言い、君原は戦慄が走ったという⁶⁹⁾。その後、椎間板ヘルニアで入院する円谷を中央大学陸上部監督の西内が見舞った際には「もしメキシコオリンピックに出られなかったら、わたしは国民を裏切ったことになるのでしょうか」と聞いたという⁷⁰⁾。円谷にとって国民の期待に応えることこそ、メダリスト円谷幸吉としての役割であり、それをなし得なければ自分ではないと感じてしまったのかもしれない。しかしアレントに言わせれば、「ヒーローに、英雄的な性質は必要ない」のである⁷¹⁾。

教育学者の小玉は、働くことにアレントのいう「行為」の概念を取り入れ、「アマチュアリズム」の可能性を探る⁷²⁾。前に見たように「行為」とは公的領域において人々が優劣なく「現われる」ことを指す。それを働く現場に適用させて、人々が自分らしくあることを、有用性の概念を越えたものとして重視させることに、新しい働き方を見出せるのではないかというのである。例えば小玉はNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」の主人公、天野アキが、芸能界というプロの世界において、プロであることを拒みながらも自分らしく「現われ」る姿にその可能性を見出している⁷³⁾。それはモノづくりに興味のある人が大工になったり、英語を好きな人が通訳になったり、本来評価から逃れた「好き」の延長線上にその人の可能性を引き出すベクトルであり、円谷で言えばただ走ることが好きで続けていたらメダリストになった、という流れに他ならない。「現われの空間」で異質な他者とともに自分らしく生きること。それは「アマチュア」として決められた結論など存在しない

固有の「物語」の「英雄（ヒーロー）」になることだと言えるのではないだろうか。

5. おわりに：まとめと今後に向けて

本稿では東京オリンピックメダリストの円谷幸吉の生涯と時代背景を概観し、「アマチュアリズム」の概念を哲学的に検討することによって、人が「その人であること」を受け入れる教育学的意義を確認した。多くの人が語ってきたように、確かに円谷は「重圧」につぶされたのかもしれない。ただその一言で片づけるには、解明できない部分があった。なぜ愛する家族を置いていったのか、なぜ指導者ではなく走ることにこだわって死を選んだのか。それは円谷幸吉という人が、家族や恋人とともに一個人として「私的領域」に完全にひきこもることも、「公的領域」で他者からの評価から逃れたそのままの自分として「現われる」こともできなかったからではないか。これが「アマチュアリズム」の定義を捉え直すことにより、引き出された一つの見解である。

純粋にそれそのものを楽しむスポーツの遊戯性は、固有の人間が世界に生き生きと現われる可能性をもたらしてくれる。しかしそこに大きな目標という形で失敗の許されない約束ができてしまったとき、そこに訪れうる予期せぬことを受け入れることができなくなってしまう。自分自身を追い詰めてしまう。異質な他者とともにある世界の中で、「アマチュア」として、「英雄（ヒーロー）」として生きる失敗や苦難も含めた固有の物語にこそ、スポーツの遊戯性が持つ可能性があるということを今一度考えてみたい。

そしてこのことはスポーツに限らず「表象の世界」に生きる全ての人に共通して訪れうる現代の課題の一つでもある。何かができるようになることを通して「何者」かになることを目指す教育の場においては、「ただその人であること」を受け入れる公教育の別の重要性を見逃

してしまうリスクが包含されている。スポーツのみならず現代のエデュカシヤル現場においても「アマチュアリズム」について検討する意義は大きいだろう。

しかし本稿では検討しきれなかった課題がある。一つは組織構造と権力の関係性についての十分な考察ができていない。本論では自衛隊体育学校の構造への概観に留まったが、権力と暴力に関するアレントの考察⁷⁴⁾を掘り下げることによってそのあり方のオルタナティブを示すことができるかもしれない。二つ目にはスポーツの持つ身体性についての考察ができていない。ここではスポーツを、特に職業のうちの相対的な一つとして扱うに留まっているが、実際には単に遊戯性を持つだけでなく、人間の身体を使った行為である点はある種の特殊性を伴い、議論の余地を持つだろう⁷⁵⁾。これらの課題を今後の研究にて掘り下げていきたい。

注および引用・参考文献

- ¹⁾ 松下茂典 (2019)『円谷幸吉 命の手紙』文藝春秋。
- ²⁾ 岡部祐介, 友添秀則, 吉永武史, 稲葉佳奈子 (2010)「マラソン競技者・円谷幸吉の自死に関する一考察—競技スポーツおよび競技者の問題性との関連から」『スポーツ教育学研究』30 (1) : p.13-23.
- ³⁾ オリンピックにおける「アマチュアリズム」の変遷については第3章1節を参照。
- ⁴⁾ 子どもを公共性の担い手として捉えるような市民性教育については、小玉重夫 (2016)『教育政治学を拓く 18歳選挙権の時代を見すえて』筑摩書房。を参照。小玉は同書において、教育を政治と切り離し子どもを教育される対象としてのみ捉えてきた近代的教育のあり方から距離を置き、複数性を前提とした公共的世界の中でアイデンティティを共有しない異質な他者として子どもを捉えるような教育のあり方を提示している。

- ⁵⁾ 本節の円谷の生涯については、松下 (2019) 前掲書を中心に、長岡民男 (1977)『もう走れませんか：円谷幸吉の栄光と死』講談社., 沢木耕太郎 (1979)『敗れざる者たち』文芸春秋., 青山一郎 (1980)『栄光と孤独の彼方へ：円谷幸吉物語』ベースボール・マガジン社., 青山一郎 (2008)『孤高のランナー：円谷幸吉物語』ベースボール・マガジン社., 橋本克彦 (1999)『オリンピックに奪われた命：円谷幸吉, 三十年目の新証言』小学館。を参照。
- ⁶⁾ 高部雨市 (2017)『クレージー・ランニング = Crazy Running : 日本人ランナーは何を背負ってきたのか?』現代書館., 松下 (2019) 前掲書参照。本によって異なり、長岡 (1977) 前掲書 p.35 では、①自分のことは自分でせよ、②他人に迷惑をかけるな、③やり始めた事は、最後までやり遂げよ、橋本 (1980) 前掲書 p.29-30 では①人から呼ばれたら必ず返事をする②いつもきちんと挨拶をする③自分の家でも、よその家でも自分の履物はきちんと揃える、となっている。
- ⁷⁾ 松下 (2019) 前掲書 p.60.
- ⁸⁾ 本節の円谷の遺書、それに対する川端康成、三島由紀夫の記述は、松下 (2019) 前掲書、三島由紀夫・佐藤秀明 (2019)『三島由紀夫スポーツ論集』岩波書店., 石川九楊 (2000)「涙なくして読めぬ遺書—円谷幸吉 + 日航機事故犠牲者 (特集 世紀の遺書) — (あの人のさよなら)」『芸術新潮』51 (12) : 18-23. を参照。
- ⁹⁾ 『芸術新潮』(2000) 前掲書。
- ¹⁰⁾ 以下、5人の兄、姉夫婦へ同様のメッセージが続く。
- ¹¹⁾ 計17名の甥姪の名前が続く。松下 (2019) 前掲書によるとその中に一部氏名の間違いがあった。
- ¹²⁾ 長岡 (1977) 前掲書 p.26-27.

- 13) 内海和雄 (1987) 「アマチュアリズムの終焉—個人主義の崩壊から公共性の復権へ」『人文科学研究』(26): p.123.
- 14) 同上論文 p.151.
- 15) 同上論文 p.143.
- 16) 同上論文 p.153-154. ならびに谷口源太郎 (2019) 『オリンピックの終わりの始まり』コモンズ. p.37-42 参照.
- 17) 同上書 p.40.
- 18) 内海 (1987) 前掲論文 p.153.
- 19) 同上論文 p.144.
- 20) 同上論文 p.145.
- 21) 同上論文 p.147.
- 22) 渡邊陽子 (2016) 『オリンピックと自衛隊: 1964-2020』並木書房.
- 23) 同上書 p.252.
- 24) 松下 (2019) 前掲書 p.87-88.
- 25) 渡邊 (2016) 前掲書 p.295.
- 26) 長岡 (1977) 前掲書 p.27.
- 27) 松下 (2019) 前掲書 p.208.
- 28) 同上書 p.85.
- 29) 同上書 p.185.
- 30) 武田薫 (2014) 『マラソンと日本人』朝日新聞出版. p.123.
- 31) 高部 (2017) 前掲書 p.33.
- 32) 武田 (2014) 前掲書 p.152.
- 33) 同上書 p.167.
- 34) 高部 (2017) 前掲書 p.33.
- 35) 武田 (2014) 前掲書 p.168.
- 36) 同上書 p.169.
- 37) 同上書 p.169.
- 38) 松下 (2019) 前掲書 p.59. ではこれを美学ではなく、トラウマだと述べている.
- 39) 同上書 p.90.
- 40) 同上書 p.97-98.
- 41) 同上書 p.99.
- 42) 樋口聡 (1994) 『遊戯する身体: スポーツ美・批評の諸問題』第4章「スポーツと労働をめぐる遊戯論的考察—リガウアとグートマンを超えて—」大学教育出版.
- 43) 同上書 p.99.
- 44) 第7代国際オリンピック委員会会長 (1980-2001) を務めたフアン・アントニオ・サマランチ (1920-2010) の時代「五輪のテレビ放映権やスポンサー企業の協賛金などの収入を確保し、五輪活動の財政基盤を強化した. 独裁的な改革で五輪をイベントとして立て直したものの、過度の商業主義や招致を巡るスキャンダルなど負の遺産も指摘されている.」日本経済新聞電子版 2010 年 4 月 21 日「サマランチ前 IOC 会長死去 五輪の財政基盤強化」2020 年 9 月 26 日アクセス https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG21059_R20C10A4CC1000/
- 45) 樋口 (1994) 前掲書 p.100.
- 46) 同上書 p.100-101.
- 47) 同上書 p.102.
- 48) 同上書 p.103.
- 49) 同上書 p.107.
- 50) 同上書 p.107.
- 51) 同上書 p.112.
- 52) 今村仁司 (1988) 『仕事』弘文堂. p.229 の註において今村は世界関係行為または社会的行為を区分する仕方はいろいろあるが、ここでは人間の諸活動に関する古代ギリシア的思想をどう解釈するかについてのみ、部分的にアレントの『人間の条件』における解釈を採用するとしている.
- 53) 樋口 (1994) 前掲書 p.113-114.
- 54) 今村 (1988) 前掲書 p.215.
- 55) 樋口 (1994) 前掲書 p.114.
- 56) ハンナ・アレント (志水速雄訳) (1994) 『人間の条件』筑摩書房. =Arendt, H (1958) The Human Condition, Chicago: University of Chicago Press.
- 57) ハンナ・アレント (森一郎訳) (2015) 『活動的生』みすず書房. = Arendt, H (2002) Vita activa, oder, vom tätigen leben,

München: Piper.

- 58) 以下、本稿ではアレントが母国で記述し直した *Vita activa, oder, vom tätigen leben* ならびに『活動的生』(2015)を参照する。
- 59) ハンナ・アーレント (森一郎訳) (2015) 前掲書 p.218. Arendt, H. (2002) op. cit., p.214.
- 60) 同上書 p.221-222. ibid. p.217.
- 61) 同上書 p.218. ibid. p.214.
- 62) 同上書 p.77. ibid. p.77.
- 63) 齋藤純一 (2000) 『公共性』岩波書店 p.40.
- 64) アレントは古代ギリシャにおける戦いという概念を「際だちあい」としてのアゴーン精神と結び付け、人間の共同生活の最高の形態としてポリスの組織形態にも結び付けた。ここでの競い合いにおいては、双方に完全に現象できる機会が与えられ、両方の側に神的なものがあるのだということが明確に示されるという。ハンナ・アーレント (ウルズラ・ルツ編／佐藤和夫訳) 『政治とは何か』(2004) 岩波書店. p.79.
- 65) ハンナ・アーレント (森一郎訳) (2015) 前掲書 p.232. Arendt, H. (2002) op. cit., p.227.
- 66) 同上書 p.233. ibid. p.228.
- 67) 同上書 p.232. ibid. p.226.
- 68) 齋藤 (2000) 前掲書 p.43.

- 69) 松下 (2019) 前掲書 p.129.
- 70) 同上書 p.132.
- 71) ハンナ・アーレント (森一郎訳) (2015) 前掲書 p.237. Arendt, H. (2002) op. cit., p.232.
- 72) 小玉重夫 (2013) 『学力幻想』筑摩書房.
- 73) 小玉重夫 (2014) 「職業教育と普通教育の間：アマチュアリズムの方へ (司会論文, フォーラム1 学校批判としての職業教育を読み直す)」『近代教育フォーラム』23: 15-20.
- 74) ハンナ・アーレント (山田 正行訳) (2000) 『暴力について：共和国の危機』みすず書房においてアレントは、「権力 (パワー)」と「暴力」を区別し、暴力行為の本質の中に「手段一目的」のカテゴリーを見出している。
- 75) 例えば小玉重夫 (2014) 「教育・身体・ポリティクス」『スポーツとジェンダー研究』12: p.130-136 において小玉は、フーコーの主体概念やバトラーの遂行性 (performativity) 概念を用いながら「教育において身体とは、主体の同一性に回収されない、多様なアイデンティティ、多様な主体形成の帰趨がゆだねられる場であり、また同時に、自己とは異質な他者へと関係づけられる場でもある。」と述べる。

受付 2021 年 3 月 29 日

受理 2021 年 6 月 5 日